

——あらゆる問題の解決のヒントが示された書物

竹村 尊敬する伊與田先生とこうして対談ができるなんて光栄の至りです。伊與田 いや、易の話ということだけれども、僕はいま九十二歳。易を学んだのは随分前のことで忘却の彼方です。それで竹村先生に教えを受けようと思つてやつてきました。

竹村 ご冗談を……。一昨年の伊與田先生の『大学』講座（致知出版社主催）は一受講生として参加させていただきましたが、先生が達筆な字で書かれたテキストを毎回音読し、深いお話を拝聴させていただきまして、本当に勉強になりました。

伊與田先生は安岡正篤先生に師事され、数多くの古典を学びご自身を高めてこられたと伺っています。先生が最初に『易経』を学ばれたのはいつ頃のことなんでしょうか。

伊與田 それは忘却の彼方やから、

記憶がはっきりしている竹村先生のほうからどうぞ（笑）。

竹村 お言葉に甘えて僣越ながら私のほうから口火を切らせていただきます。二十歳の頃、私はやはり中国古典の『莊子』や『老子』が好きで、小説のように読んでいたんです。その時に『易経』に触れる機会があったのですが、「難しい占いの本だなあ」というくらいで、それほど引きつけられませんでした。

ところが一年ほど後のことですが、『易経』の冒頭にある龍の話が占いとしての吉凶でなく、ものごとの過程として読めることに思いあたり、「これは」って思つたんです。

伊與田 「乾為天」の一節ですね。竹村 はい。龍の動きが映像としてダイナミックに捉えられて、まるで自分がその中に入ってしまったかのような気持ちになりました。「これはおもしろい」と読み出したところが『易経』に引きつけられました。以来易経病になつてしまいました（笑）。それからかれこれ三十六年です。

伊與田 独学で学んでこられたのですか。

竹村 独学というところまではいいんですが、学問というようなものではない



易経研究家

竹村 亞希子

たけむら・あきこ 愛知県生まれ。中国古典『易経』を分かりやすく解説する一方、企業経営者や経営幹部に『易経』に基づくアドバイスを行っており、その実績から多くの厚い信頼を得ている。講演活動の一方で、NHK文化センター『易経』講座の講師を務める。著書に『人生に生かす易経』（致知出版社刊）『リーダーの易経（PHP研究所刊）』などがある。

『易経』に見るリーダーのあり方

悠久の歴史の中で人々に読み継がれてきた四書五経の一つ『易経』。それは同時に上に立つ者のあり方を示すものとして古来、数多くの指導者たちが考えや行動の指針としてきた指南書でもある。安岡正篤先生の門下で『易経』にも造詣が深い伊與田覺氏と、伊與田氏を敬愛し、このほど弊社より『人生に生かす易経』を出版した易経研究家の竹村亞希子さんに、『易経』が教える将の条件を語り合っていた。



論語普及会学監

伊與田 覺

いよた・さとる 大正5年高知県生まれ。学生時代から安岡正篤氏に師事。昭和15年青少年の学塾・有源舎発足。21年太平思想研究所を設立。28年大学生の精神道場有源学院を創立。32年関西師友協会設立に参与し理事・事務局長に就任。その教学道場として44年には財団法人成人教学研究所の設立に携わり、常務理事、所長に就任。62年論語普及会を設立し、学監として論語精神の昂揚に尽力する。著書に『人に長たる者の人間学』『大学』を素読する、監修に『論語一日一言』（いずれも致知出版社刊）など。

●対談——伊與田覺&竹村亞希子

いんです。想像力を働かせて何回も読んでいくうちに、シンプルな言葉に多様な意味合いがあることに気づきまして、膨らませたイメージと自分の体験と重ね合わせながら「あの時抱えていた問題の解決のポイントは何だったのか」というようなことを考えるようになりまして。

飛躍的に理解が進んだのは、ある方の武道論を読んだ時でした。龍の成長過程が認識論や技術論に重なり合っ

心に響いてきました。

そうして、『易経』という書物にはありとあらゆることのヒントが書かれていて、膨らませたイメージと自分の体験と重ね合わせながら「あの時抱えていた問題の解決のポイントは何だったのか」というようなことを考えるようになりまして。

伊與田 しかし、『易経』を専らにやっておられるというのは大したことです。古典に親しまれたのは、ご両親の影響もあつたのではありませんか。竹村 父が玄米菜食の運動家で二木

謙三先生なども親しくしていたものですから、書齋には自然食の本に交じつて四書五経など古典もありました。そういうものを小さい頃から雑学的に読んでいたことも多少は影響しているのかもしれない。

——『易経』を筆写  
「研究に七百時間を費やす」

竹村 伊與田先生の『易経』との出会いはどういふものでしたか。伊與田 そのことを話さなくては